

# 三河の昆虫

No. 16 1976年9月

〒448 刈谷市井ヶ谷町  
愛知教育大学昆虫研究室内  
三河昆虫研究会 発行  
第一プリント社 印刷  
☎ ◀56▶ ㊟ 4463

## 虫供養碑建設特集号

### 虫供養碑に寄せて

大平仁夫

教育大が今の所に移ってから、同好者が気軽に集まることも少なくなったので、何か機会を作ってほしいという声はずいぶん前から聞かされていた。そこで、虫供養碑でも作ってはどうかという話になり、昆虫研究室OB、三河昆虫研究会、愛教大東南アジア自然科学調査団、愛知生物同好会の皆様方に賛同をお願いした所、多くの方から御協力を頂くことができ、立派な

供養碑が完成して、5月30日に供養祭をすることができた。今後は、毎年夏休みに供養祭を開いて、虫についてのさまざまなことを話合うことにしたいと思う。

ここに、世話を下さった関係者の皆様、趣旨に賛同していただいた皆様に世話人を代表して心から御礼申し上げる。

### 学大に昆虫クラブが作られた頃

高柳久和

学芸大学(現教育大学)に昆虫研究室や昆虫クラブができたのは、昭和26年4月からで、神谷、大平先生が来られてからである。それまでも、個人的な研究はあったが、主に名古屋昆虫同好会や三河昆虫同好会に属していた。

はじめは、伊藤先氏や上田薫氏を中心に、鈴木一二三、勝田斉(大山)、岩月学、中原武、筆者らが、大平先生の所に集って昆虫クラブが自然発生した。そして、夏には岐阜県根尾村や長野県八ツ岳などに採集にでかけた。筆者は高山に行くことがはじめてなので、満員の中央線も

苦にならず、高原を走る小海線のノロノロ運転も興味あるものであった。松原湖～中山峠～渋ノ湯を重いリュックを背負って登ったが、すばらしい原生林や花に集るクジャクチョウ、クモマベニヒカゲ、朽木中のガロアムシなど、今でもはっきりと思い浮かべることができる。

その年の12月に、会紙「幼虫」が手刷りで発刊された。判読しないと読めないような印刷だったが、1年間の成果のまとめができて大変嬉しく思ったものである。特に、表紙は筆者が飼育したヤマトモンシデムシの幼虫の生態図が載

せられていて一層感深いものであった。

それから26年目に研究室が中心になって虫塚ができ、心のよりどころができたのは大変意義あることだと思う。神谷先生の幼虫の発刊のことばの中に「孵化したばかりの幼虫が一人前の成虫になるまでは、まだ多くの困難に出会うと思う。幼虫が健全に育つか益虫になるか、また、

害虫に終るかは幼虫自身の活動力によるので、諸君の批護によって一日も早く立派な成虫になるよう期待する。」とあるが、この頃立派な論文を書いたり、海外活動をする会員もでてきたことはうれしい限りである。(昆虫研究室OB代表)。

## 虫塚によせて

伊 奈 克 己

「なべて過ぎゆくものは  
比喩にすぎず」          ゲーテ

この一句のように「現実の事実を、実はその像であるものの像としてみなす」という風潮がみられる。とにかく、私たちの物の考え方というものはドライな方向へと向かっているようである。こんな世の中で供養碑とはどんなものなんだろうか。

私たち、虫に縁のあるものは、まず虫を捕えなければ始まらないらしい。そうすると当然のごとくピタとも動かぬようにする。つまり、虫は死ぬのです。そこで、虫を採るものは「死」への畏怖を感じるのであろうか。それだけではないような気がする。命はかない、小さな虫た

ちは、なべて過ぎゆくものと考えていいのだろうか。否虫たちも私たち同様の生物として何ら差をつけることのできないのであり、虫たち自身が自ら創造し、たゆまない生活を営んでいるのである。彼女らは比喩にされるべきでないのだ。となれば、虫という現実の事実より逃避することは許されないのである。

虫塚は、私たちの採集による殺戮と自然破壊の一端にまきこまれた虫たちの迫害をすべて引受けてくれるものではない。この一見逃避の象徴とみられる虫塚は、逆にそれを阻止するもの、同じ自ら創造し続けるものとしての虫たちへの愛の逆説的結晶として存在すべきものではないだろうか。(昆虫クラブ代表)。

## 虫塚に寄せて

村 松 時 夫

虫の好きな者が集まり会を結成したのが今から6年前。今もって細々と会を続けています。先般、虫塚建立の連絡を頂き、日頃気になっていたことが一気に解決しました。虫の供養ができたのです。今さらながらに“虫”の勉強を続けなくてはと決意を改たにするものであります。

研究の対象になる「生物」とは、果して「せいぶつ」なのか、それとも「いきもの」なのかを自らの頭で再考する必要があるようです。せいぶつは、数々の文献に掲載されたレポートの

集積にすぎないことが多い。いきものとは、脈々と息づく神秘に満ちた生きた小宇宙のはずです。生物の研究を否定するものではありません。自らの五感で得た生命の驚異は、これら文献から得た興味などは比べものになりません。私たちは、生命の神秘性を感じていたいものです。……と虫塚で思いました。

(愛知生物同好会代表)